

講演概要

アート・歴史・自然が紡ぐ文化的処方 ～欧州の事例から保養と健康を考える～

藤野 一夫

(芸術文化観光専門職大学前副学長 (同名誉教授) / 神戸大学名誉教授/MCE 研究所理事・主任
研究員)

ドイツやチェコなど中部ヨーロッパには、温泉などを利用した自然療法と芸術文化体験を組み合わせたクアオルト（温泉保養地）の伝統があり、長期滞在による（保険適用の）治療を快適なものにする仕組みがウェルビーイングの向上にも貢献しています。少子高齢化に歯止めのかからない現代日本の地域社会において、誰もが健康で幸福な人生を享受できる仕組みを、大屋の豊かなアート・歴史・自然から紡ぎ出して社会実装する方法を考えたい。これまでアートや歴史・文化を通じた大屋のまちづくりを「文化的処方」の切り口で振り返りながら、どのようにアートと歴史と自然と健康をリンクさせるかを提案いたしました。

そこで参考にした海外の事例は、ドイツとの国境に近いチェコの有名な 3 つのクアオルト。なかでもフランツェンスバートに 3 週間滞在して体験した自然療法の数々、そして音楽（文化芸術）と自然に日々触れることの重要性を指摘しました。18 世後半に地元の医師アドラーが鉱泉の効能を発見。1793 年皇帝フランツ 2 世が自の名前を付けたコロニーを許可し、理想的なクアオルトの都市計画を開始し、「小ウィーン」と呼ばれて長期滞在型療養のメッカとなりました。とくに泥炭療法が有名で、19 世紀末からは不妊症治療のために多くの婦人が単身で訪れるようになりました。

また日本への応用事例として、日本型クアオルトの聖地 「心と体がうるおうまち」山形県上山市の「上山型温泉クアオルト事業」を紹介しました。一人当たりの医療費や高齢化率が県内で最高水準の同市は、治療から予防への転換を図り、クアオルト健康ウォーキングを中心に市民の健康を増進し、健康に興味のある観光客や企業を引き受け、交流人口の拡大に寄与してきました。2011 年にクアオルト推進室を設置し、保健師も配属。クアオルト健康ウォーキングの市民認知度 80%以上に達しています。